

# 飛翔の歴史を 振り返る



今回七十号を迎える飛翔。ここで飛翔の歴史を振り返ってみましょう。

飛翔第一号は一九七四年（昭和四十九年）に発行され、それから一年に二回のペースで発行されていきました。発行当初の飛翔は、

現在の飛翔とはかなり内容が違い、先生方や学生から記事を募る自由投稿型の雑誌だったようです。

また、当初はすべて白黒でしたが、号数が増えるごとに表紙、裏表紙、グラビアのページがカラーとなっていきました。雑誌の大きさも第四十九号までは、今の三分の二の大きさでした。

過去の記事は、前述したように寄稿が主体の雑誌であったため、先生方が専門分野について書いた論文形式の記事が掲載されていました。また、学生からも問題提起をした積極的な論文だけでなく、外部からの、例えば警察署の方からの投稿もありました。多くの人の意見が詰まった、学生にも先生方にも糧となるような一冊の本のようでした。

号数を重ねるに連れて、様々な企画が登場します。一番長く続いている企画が『研究室紹介』です。五十号（一九九六年）から始まり、十年にわたって続く長寿企画です。また、名前は違いますが、過去には「学問のすすめ」「教官インタビュー」としても研究室を紹介していたようです。

それではここで、過去の記事の中から面白い記事を抜粋したいと思います。

\* \* \* \* \*

〈編集後記 五十四号より〉

・ある日、コンビニでパック牛乳を買ったら、割り箸がついてきた。

・一括変換クイズ

① 著部リンパ腫場② 真行ける弱村

③ 汲め博（みなさん読めますか？）

編集後記には編集員の苦労とつづやぎ、そして、ちょっとした遊び心が表れています。みなさんは読めましたか？

〈風刺漫画 二十八号より〉



「君の長所は？」と面接官から投げかけられた質問をテニスボールに見たてて、それを「私は明るいです」と返答を書いたラケットで面接官にボールを返す。この絵を描いた編集員は「ちゃんと返さなくちゃ、面接試験」と答えています。まさに就職試験で焦る学生を見事に風刺で表現しています。

〈四九生（一期生）に聞く 八号より〉

「卒論の書き方教えます」

これから卒論を始める人たちに捧げる卒論対処三箇条として①たかが卒論とたかをくくろう。こう思いこむことが、卒業研究を無事に終えるために、一番重要な点だと思う。身体を壊したらおしまいだ。②にぎやかな研究室に入り込もう。色々な話が聞けて楽しかろうし、知人をたくさん作っておくにこしたことはない。③卒論は早く書きあげよう。何でもいから早く終わっちゃったほうが楽でいい。

卒論は、大学で学問をした、ということの記念碑である。しかし、記念碑にしてしまうことのできない数多くの貴重な体験を四年間の大学生活で学ぶことができた、という事も、忘れられない実感である。

〈さようなら東千田キャンパス四十四号より〉

総合科学部には総合科学部独特の「匂い」があることを皆さんは知っていますか？それはサビとカビとかが混ざり合ったような、いい匂いとはいえないにしてもどこことなくつかしい匂いです。

〈ごんには西条 四十四号より〉

学生・教職員をはじめとして、新たにこの地に居を構えようとする人々からも、受け入れ体制の不備や都市基盤整備の遅れなどが指摘されています。「好き好んで移転したわけ

ではない」大学側と、「頼んで来てもらったわけじゃない」地元側。お互いコミュニケーションの無いままひたすら進んできた学園都市建設。スパーマーケットが近くにないから早期誘致のための運動を一緒に起こしましょう。夏時分に窓から虫が入って困るなら、一緒に殺虫剤を撒きましょう。ただ余っているだけの自然を、都市づくりはどう活かすべきか一緒に考えてください。私達は、大学や学生・教職員の方々に、学識経験や単なる助言だけではなく、そういった熱意を強く望みます。

（東広島青年会議所理事長より）

広大移転についても積極的に地域の方に取材し取り上げており、その当時のことを窺うことができます。

☆記者から

今回飛翔を振り返ってみました。初期の頃の飛翔を読んでいると、時代性も感じられるし、多種多様な記事があつて、読んでいて刺激を受ける内容が沢山ありました。みなさんにも是非読んでいただきたいと思えました。

（担当 17生 川口由紀）

バックナンバーをご覧になりたい方は、総合科学部の事務棟一階にある飛翔編集室まで、お気軽にお越し下さい。最近の記事は総合科学部のホームページでも公開しています。

